

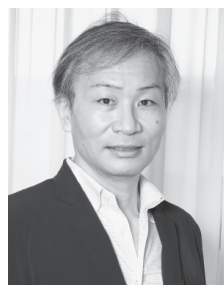
# 鶏足寺 七仏薬師像への まなざし

津田 徹英

青山学院大学文学部教授



▲鶏足寺 七仏薬師如来立像(己高閣安置、滋賀県指定文化財) 撮影:寺島典人



Profile ● つだ てつえい

1963年近江八幡市生まれ。慶應義塾大学大学院文学研究科後期博士課程単位修得満期退学。博士(美学)。神奈川県立金沢文庫学芸員、国立文化財機構東京文化財研究所文化財情報資料部長を経て2018年より現職。専門は日本彫刻史。著書に『平安密教彫刻論』『中世の童子形』『中世真宗の美術』ほか。近刊に『近江八幡の歴史』第九巻(共著)がある。

七体の薬師如来像を信仰する「七仏薬師」は平安時代以降、天台宗が牽引した。天台宗における「七仏薬師」の淵源を求めるとき、比叡山延暦寺一乗止観院の根本中堂において最澄自刻と伝わる本尊像とともに同一厨子内に秘仏として安置されていた尊像に行き着く。己高山に伝来した七仏薬師像(以下、鶏足寺像)も、今は失われた延暦寺根本中堂の七仏薬師の姿かたちを踏襲した群像というのが大方の認識であったように思う。しかし、延暦寺の七仏薬師像の姿かたちを鎌倉時代に検分した慈円(1155〜1225)の手記(『四帖秘決』所載)に拠ると、七体の像高はともに二尺であり、いずれも右手は肩の高さで掌を正面に向け、親指と中指の指先を接し、余指

を軽く伸ばし、左手は垂下して掌を開くのみで、薬壺は手中になかったという。鶏足寺像それぞれの像高(三尺前後)はもとより両手のかたちとは異にしていたことになる。その鶏足寺像について、数年前に東京国立博物館の西木政統さんが学術調査を行った折に、声をかけていただき、はじめに間近で拝することができた。鶏足寺像は三尺像の範疇にありながら中尊像のみやや像高が小さく、一木造で内刳りが無い。加えて、着衣(大衣)を吊り袈裟風にあらわし、脚部にまとう裙は丈が短く足首をあらわしており、残りの六体と像高、構造(一木割刳造、内刳りあり)、着衣の表現を微妙に異にしている。要は中尊と六体におけるこれらの差異をどのように理解するかにある。私見では最初に中尊像が十一世紀末頃に単独で造顕されたのち、百年ほどの時を経て六体が追加造立され、「七仏薬師」になったように考える(ただし、中尊像の向って右隣の一体のみ室町時代(15世紀)の後補とみられる)。七仏薬師である点において、延暦寺像以来の伝統に連なるであろうことは否定しないが、像高と両手のかたちを延暦寺像と比べると鶏足寺像独自の信仰と展開があったといえよう。ただし、鶏足寺像は造像に関わる一次史料を欠いており、真相を明らかにし得ない。